

# じゃんがら念仏踊り

大正大学教授 玉山成元

八月の盆が近づくと『じゃんがら念仏踊り』の季節となる。波に千鳥を白くぬいた濃紺の浴衣。白い手拭いで前鉢巻をきりりとしめ、幅広い白の両たすきを背で結んで端を長くたらず。白い手中と白足袋に草履。みるからに派手な面々が、紋付き羽織り姿で提灯を持った会長の後に続く。「締め太鼓」を首から下げた太鼓打ち三人。太鼓には「南無阿弥陀仏」と染めぬいた布が胴を巻いている。その後、木杵に吊るした鉦を首から下げた鉦摺十二人が「道中はやし」を奏しながら従う。いわき地方(福島県浜通り)なら、どこでも盆月十三日から十四日にかけて行われる新盆供養の行事で、約百団体もあるという。

会長の焼香がすむと、太鼓打ちを囲んで輪を作り念仏となる。このときは鉦を打たず、太鼓に合わせて歌いながら手踊りをする。「ナアハアハア、メエヘエヘ」という情緒あふれる前歌に続き、「盆では米の飯 おつけでばナス汁 十六ササゲのよごしはどうだい」とか、「今年しや豊

年 穂に穂が咲いて 道の小草にや米がなる」など、即興的に作られたと思われる本歌が歌われる。その後、大鼓が激しく打たれてテンポを早めると歌はやめ鉦摺りは鉦を激しく叩き、後ろ向きに回りながら踊り続け、ときどき「やれ やれ やれ やれ」といつて囃す。これを「ブツツケ」といつているが、やがて太鼓打ちは手をかざしながら「曲打ち」をする。体を柔軟にくねらせながら、先に白い毛のついた太鼓のバチを上下左右に動かす。クライマックスの見せ場である。その後、なりものは静かになり、「止め太鼓」になる。こうして念仏踊りが終ると再び会長を先頭に、行列をして次の新盆の家をまわる。「じゃんがら念仏踊り」は、祐天上人が、信仰の薄い、いわき地方の人々に念仏を布教するため、南無阿弥陀仏の六字の名号を頭におこみ、「ナアハアハア、メエヘエヘ」と歌わせて、知らず知らずのうちに念仏をとなえさせるようにしたといわれている。しかし最近の研究によると、江戸時代のはじめごろには、

すでに念仏踊りが行われていた。平藩主であった『内藤家記録』には、明暦二年(一六五六)に行われていた記述がある。この『じゃんがら念仏踊り』は、ことのほか、いわきの人々に喜ばれ、急速に広まっていった。そして内容も派手になっていった。そのため寛文十一年(一六七二)には、『じゃんがら』を踊ることはよいが、大勢で派手に行ってはならない」という藩からの命令まで出ている。寛文十一年というと、修行中の祐天上人が、常陸国で累を救済した前年に当る。このころには藩令まで出されるほどの流行ぶりであった。もちろん現在のような一糸乱れぬ整然としたものではなく、非常に土くさい庶民的なものであったに相違ない。おそらく念仏踊りの輪の中に、たくさんのお若男女が加わって踊り続けたものであろう。やがて、その中には男装や女装をしたり、武士の仮装をするものやふんどしのひもを結びつけて踊っていたものまで出る有様であった。各自がパフォーマンスを楽しむうちはよいが、それ

## じゃんがら念仏踊り

大正大学教授 玉山成元

がエスカレートしてゆき、目にあまるものとなつていった。このころ都で流行した女歌舞伎も、もとは念仏踊りであった。役者は「光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨」という損益文を称え、南無阿弥陀佛と念仏しながら花道を出てくる。やがて舞台中央に進み、そこで踊るのが基本である。芝居で見ている観客が興にのると、自分も舞台にかけのぼり、好きな役者と一緒になつて踊る。だから爆発的な人気になり、やがて禁止令が出る。今でも人気のある若者のコンサートには沢山の人がおしかけ、怪我人まで出ることが多い。あるいは地方巡業の役者さんに、多額のお金をはずんだり、次から次へと巡業先を追いかけ、高価なプレゼントをするオバンも少なくないという。今も昔も変りはないが、それを過ぎると風俗問題に発展し、悲劇がおこる結果になる。楽しみの少なかった江戸時代に、公然と老若男女が踊りあかす『じゃんがら念仏踊り』が流行したことは当たりまえである。しかし、だんだん横道にそれ、明治

六年（一八七三）には禁止令が出た。その後すぐ復活したが、江戸時代のエネルギーが失われた姿は消え、男性中心の現行のものとなった。

念仏踊りというのは、口で念仏をとえながら、太鼓や鉦を打ちながら踊る踊りである。その目的は災厄退散と亡魂鎮送であり、五穀豊穰や虫送り念仏の場合もある。しかし庶民の娯楽として大流行したことは間違いない。伝えられるように、祐天上人がそこに目をつけて念仏布教の一助としたことは、ある意味では、もっともと思われる。しかし事実では明らかでない。しかし、いわき地方では、古くから郷土の名僧として祐天上人を尊敬し、良いことは何でも祐天上人が指導されたことになっている。江戸中期の『じゃんがら念仏踊り』には、歌舞伎の影響が少なくないと私は考えている。しかし、その人気の根本を祐天上人におけるといってよい。こまき地方の特色があるといつてよい。こまきでなければ祐天信仰といつてもよいであろう。